

〈論文〉

エリザベス期イングランドにおける「リパブリカニズム」

—当時の「言説」を手掛りに—

山根 明 大

はじめに

本稿は、主に政治的出版物における「言説」を取り上げることにより、エリザベス一世時代のイングランドの「リパブリカニズム」について概観しようとするものである。周知の通り、「リパブリカニズム」(もしくは「シヴィック・ヒューマニズム」という問題はH・バロンやJ・G・A・ポコックらの研究に端を発するものである。まずバロンは、ルネサンス期のミラノとフィレンツェにおける政論家の時事評論を詳細に検証することにより、共和国の市民としての彼らの「意識の危機(Conscience Crisis)」を「シヴィック・ヒューマニズム」という問題として提示した¹⁾。

このような議論を承けてポコックは、「リパブリカニズム」あるいは「シヴィック・ヒューマニズム」がルネサンス期イタリアを経て、一七・一八世紀のイギリスと建国期アメリカにおける中心的な政治思想になったと主張した²⁾。彼の「リパブリカニズム」はアリストテレスの『政治学』を重視しており、いわば「徳性ある自立的市民が政治を担ってこそ、公正なる秩序が実現する」といったものだった。また彼は一七世紀イングランドの内乱期を、マキアヴェッリを思想的動因とする「リパブリカニズム」の議論が西欧世界に「再浮上」した時期として重視する一方で、エリザベス期と初期ステュアート朝のイングランドでは「市民的生活」や共和政についての主題が支持されなかったとしている³⁾。

以上のようなポコックの主張により、イングランドの「リパブリカニズム」は注目すべき問題として認識されるようになり、その際に内乱期以前(一六世紀半ば—一七世紀初頭)の評価の仕方が焦点となった。即ち、ポコックと同様、内乱期以前の「リパブリカニズム」の不在が主張

される一方で、この時期の政治的活動および思想を再評価する動きも表れるようになったのである⁴⁾。特にエリザベス期のイングランドについて言うならば、P・コリンソンは、ポコックがエリザベス期の政治的思考と政治的活動の「共和主義のような様式(quasi-republican modes)」を過小評価していると批判した上で、「君主政共和国(monarchical republic)」という問題提起を行い、その基盤を「地方」に求めている。またM・ペルトネンは「活動的生活(vita activa)・徳(virtue)・混合政体(mixed constitution)」などの政治的語彙と課題の共有を根拠として、内乱期以前から既に「リパブリカニズム」の衝撃がイングランドにもたらされていたことを強く印象づけた⁵⁾。ペルトネンによると、特にエリザベス期のイングランドでヒューマニストと共和主義者の議論が最も普及・利用されたのは、(宮廷という)政治共同体の中心というよりはむしろ周縁である都市の共同体においてであった⁶⁾。

これに対し、ポコックは二〇〇三年に再刊された『マキアヴェリアン・モーメント』の後書の中で、コリンソンやペルトネンらの批判に対し、次のような反論を試みている⁷⁾。つまりポコックは、ペルトネンらが指摘していることの多くは「タキトウス主義」に属するものであり、それは宮廷の共和主義以上のものにはほとんど達しなかったと主張した。その上でポコックは、イングランドを共和国として想像するように、またそのような共和国の基礎となり得るような能動的市民生活の概念を探求するように強いるためには、内乱、統治の解体、そして実際の国王殺しが必要であったという点を改めて強調した。とはいえ、ポコックは依然として、内乱期以前の「宮廷外」の政治文化・思想を過小評価していると考える。

以上のような論争を経て、現在の「リパブリカニズム」研究はワイトゲンシュタインの「家族的類似」という概念が雄弁に物語るように、その多様性を前提に議論がなされている⁸⁾。例えば本稿に直接関係のある研究として、『初期近代イングランドの君主政共和国』という論文集が出版され、コリンソンの提唱した「君主政共和国」が再考されつつある⁹⁾。しかしながら、このような研究(コリンソンやペルトネンの研究も含めて)を考慮しても、エリザベス期の「リパブリカニズム」の全体像が提示

されているとは到底言えない。

そこで本稿では、既存の研究を参考にしながら政治的出版物における「言説」に注目することにより、エリザベス期の「リパブリカニズム」について概観するのだが、この「リパブリカニズム」は「政治参加」の意識全般(概して「バーリンの『積極的自由』」を意味しており、広義の「共和主義的思考」を指している。換言するならば、このような意味での「リパブリカニズム」を考察する際の「コンテキスト」を提示すること、これこそ本稿の目的である。

一、「コモンウェルス」論

エリザベス期の「リパブリカニズム」において、「レス・プブリカ」という概念、あるいはこの概念から生じた「コモンウェルス」論が理論上中心的な役割を果たしたと言っても過言ではなからう。例えばQ・スキナは、ルネサンス期イングランドにおいて、「公共のものと」や「共通の利益」を意味する古典古代の「レス・プブリカ(res publica)」の概念が「コモンウェルス(commonwealth)」もしくは「コモンウィール(commonweal)」の概念に読み替えられ、数多くの社会経済改革の主張が新たに喚起されたと述べている¹⁾。

特に一六世紀初頭のイングランドは、薔薇戦争やそれに続く内乱を終結させ、散発的な混乱を経験しながらも長期の比較的安定した平和を享受していた。その一方で、人口の増加や経済の発展に伴う社会の流動化と変貌は、「困い込み運動」に象徴されるように様々な矛盾や社会問題を生み出した。そして、前述のような平和は、内乱の中では等閑視されがちであったこれらの社会問題への取り組みを可能とする状況を作り出し、「コモンウェルス」論は正にそのような取り組みを喚起するための政治理論だったのである。トマス・モア(Thomas More)の『ユートピア Utopia (1516)』やトマス・エリオット(Thomas Elyot)の『為政者論 The Book Named the Governor (1531)』あるいはトマス・スターキー(Thomas Starkey)の『ポールとラプセットの対話 A Dialogue between Pole and Lupset (c.1530)』などは、この時期の代表的な「コモ

ンウェルス」論と言える²⁾。

しかしながら、当時のイングランドが中世の思想との連続性を保持していたのもまた事実であり、このような「コモンウェルス」論の普及といった変化は、公式化された思想というよりはむしろ態度における変化であった。とはいえ、「コモンウェルス」論とそれによって喚起された一連の改革は、一般の生活、とりわけ公的生活に対する新しい態度の出現を示していると言えよう。

G・R・エルトンもまた、「コモンウェルス」は当時、君主を頂点とする階層社会を前提としながらも、「共通の利益に関する事柄」あるいは「国民に利益をもたらすことを目的とする王国」の意味を含み、政治的共同体の全構成員が共に利益を享受して繁栄するという、一つの理想的なヴィジョンを提示するものであったと主張した³⁾。このように、当時のイングランド人にとって、「レス・プブリカ」と「コモンウェルス」はほぼ同義であり、「コモンウェルス」を問題とするほとんどの論者は、ただ公正な「コモンウェルス」を描くだけでなく、現実の社会が抱える様々な問題を指摘し、それらに取り組み、解決することではじめて真の「コモンウェルス」が実現することを強調した⁴⁾。

コモンウェルス(Commonwealth)は様々な身分や階層の人々から成る生ける身体(biung body)である。この身体は二つの性質、即ち、最も価値ある人間である靈魂(soule)と、成員もしくは器官(parts)から成り立っている。靈魂とは国王あるいは至高の統治者(supreme Gouverneur)のことである……[その一方で]コモンウェルスは定住者の集合もしくは集団であり、それは言わば我々全てにとつて母のような存在である……このコモンウェルスという言葉は、ラテン語の人々の事柄(res publica)という意味のレス・プブリカ(Respublica)に由来し、古代ローマの人々は、コモンウェルスもしくは文明社会(civill societie)の統治をそのように「レス・プブリカ」と呼んでいる。またそれ「レス・プブリカ」は、古代ギリシアの人々によつてPolitiaというギリシア語に由来する政治的統治(political government)と呼ばれ、それ(Politia)は公正に秩序づけられ、中庸な理性(moderation of reason)によつて支配される都市の統治

もしくは状態を意味している。¹⁷⁾

これはオクスフォードの学者であるトマス・フロイドの『完全なるコモンウェルス』という著作の引用であるが、ここでフロイドは「コモンウェルス」を「生ける身体」と呼ぶとともに、「レス・プブリカ」に由来するものとしている。この時期のイングランドの政体は、しばしば「ボディ・ポリテイク（政治的身体）」の理論によって定義されるのだが、ここでもその影響を看取することができる。「ボディ・ポリテイク」の理論は大抵の場合、イングランドの政体を人体に譬え、国王をその頭部に、臣民をその胴体に据えるのであるが、フロイドは前者を「靈魂」に、後者を「器官」に据えている。言い換えるならば、フロイドの「コモンウェルス」とは「至高の統治者」である国王によって統治されるものであり、必ずしも君主政と矛盾するものではなかった。

そして、このようなフロイドの主張は、古典古代の「レス・プブリカ」が中世から初期近代にかけてのヨーロッパ固有の条件の中で、一定の変容を被りながら受容されたということを示唆していると言えよう。即ち、そのような「レス・プブリカ」は、世俗の王権と教会を包括する共同体を意味し、その結果、統治の諸形態の違いを問題とする視点は希薄になり、(君主による恣意的な支配ではない)君主政もまた「レス・プブリカ」と呼ばれた。当然のことながら、「レス・プブリカ」の訳語とされている「コモンウェルス」も統治形態の一つではなく、君主政を含めたあらゆる統治形態の基盤となり、またそれらが実現を目指すべき状態を意味していた。このことこそ、「コモンウェルス」がエリザベス期の「リパブリカニズム」の中心となり得た所以であり、「君主政共和国」もしくは「混合政体」を(理論上)可能にしたのであった。

そして最も重要なことは、以上のような「コモンウェルス」がエリザベス期イングランドにおいて、有徳な市民が活動する空間として再認識されつつあったということであり、「コモンウェルス」という枠組みの中で「徳」・「市民」・「活動的生活」といった主張がなされたということである。とりわけ「活動的生活」は、ヒューマニズムの受容に伴って活性化された古典古代以来の伝統的な議論であり、「哲学者の生活」としての「観想的生活(vita contemplativa)」という伝統的な対抗理念によつ

て、常にその倫理的価値の優位性を問い直されてきた。

ルネサンス期のヒューマニストの著作を読む際、我々はしばしばそこで「雄弁(eloquentia)」に大きな価値が置かれていることに気付くが、彼らの運動は本来的には学問運動として、精緻な論理学を有する形而上学的スコラ哲学と対決し、内容と形式、思想と表現、英知と雄弁、哲学とレトリックの総合を追求するものであった。一方、ヒューマニストの運動は単なる学問運動に留まらず、彼らがヨーロッパにおける二つの文化的伝統である哲学とレトリックのうちの後者を代表する場合、それは政治に対する実践的コミットをも意味した。²⁰⁾ ルネサンス期のイングランドにおいて、「活動的生活」が「観想的生活」との対比を伴いながら主張されたのは、このような思潮を背景としている。

しかしながら、当時のイングランドのヒューマニストは倫理的価値の選択問題に加え、「活動的生活」の実践可能性という問題に直面することになった。²¹⁾ 即ち、イタリアのような都市共和国の「広場」とは異なり、国王が主宰する「宮廷」が政治の中心的な舞台となる君主政国家において、「自由な市民」としての「活動的生活」の実践は事実上不可能だったのである。このような「活動的生活」の実践の困難のみならず、「観想的生活」を尊重する新プラトン主義の普及もあり、一六世紀後半になると、イングランドの宮廷社会において「活動的生活」の価値の相対的な低下が見られるようになった。²²⁾ またこの時期のイングランドでは、宮廷における「活動的生活」の欺瞞性を強く批判したカントリ論の高揚とストア主義の復興により、「観想的生活」が浸透していった。²³⁾

とはいえ、この時期のイングランドのヒューマニストが、「活動的生活」を支持して「コモンウェルス」に対する政治的義務の実践を試みながら、観想的なユートピア論を「虚しい想像」として拒否したのもまた事実である(勿論、彼らは純粹な知的営為としての「観想的生活」の意義を必ずしも否定した訳ではない)。言うまでもなく、彼らがルネサンス期イングランドにおける政治的主体として思い描いたのは、人文主義的教養を背景に君主に「助言」する宮廷の枢密顧問官であったが、他方でこの時期のイングランドでは中央の宮廷に限らず、地域の共同体も「活動的生活」の場とみなされていた。²⁴⁾

このように、ルネサンス期イングランドのヒューマニストは、「活動的生活」と「観想的生活」の間で逡巡することになるのであるが、このことは、トマス・モアが『ユートピア』の中で王の参議官として現実政治に関与することを薦める登場人物モアと、現実政治への関与が無意味であり、哲学者にとつて有害であるとしてその薦めを拒むヒスロディの対比にも如実に示されている。尤も、このような逡巡はアリストテレス以来の伝統であり、エリザベス期の出版物の中にも看取されるものである。

しかし、幾分は観想(contemplation)の中に、また幾分は活動(action)の中に存する哲学(Philosophie)という学問を考慮すると、統治の技術(skill of government)はやはり同様に、双方(観想と活動)の上に成り立っている必要性がなければならない。観想(contemplation)に専心する者たちは、真に専ら真実についての知識(knowledge of truth)の獲得に精を出し、それ以上進もうと欲することなく、彼らの想像力を全面的に、如何なる方法で世界が知恵の雨によつて導かれ得るかを考慮することの中に止めるのである。このような者たちは、ホメロスが実際に描いている如く、權威(authoritie)や家あるいは家族に無頓着で、人と交わらない孤独な生活(priviate and solitary life)を楽しむのを常とした。そしてその心の平静(rest)、より正確には無為(idleness)から、我々はまず願望によつて彼らを説得し、それで十分でないのであれば強制によつて、彼らを市民の義務(civil ductie)の第二の部分である統治という活動(action of government)へ引き寄せるべきである。というのも、人に属する全ての必需品(commodities)を維持する際に見られるように、自然(nature)についての知識や観想は、その活動が実際に伴わなければ、無益であることが分かっているからである。

これは、翻訳者は不詳なのだが、ローレンティウス・グリマルドゥスの『助言者』という著作の英訳で、ここでも「活動的生活」と「観想的生活」が比較され、前者の後者に対する優位が説かれている。特に彼は、ストア主義の「アパテイア(apateia)」を「心の平静」あるいは「無為」と形容

することにより、「活動」の重要性を説いたのだった。また古代ギリシアでは、成年男子の市民から成る公共空間としての「ポリス(polis)」と生命保全のための私的な領域としての「オイコス(oikos)」が明確に区別されていたのだが、言うまでもなく、「市民の義務の第二の部分である統治という活動」は「ポリス」において行われるものであった。このように注目すべきは、「活動的生活」を支持する論者であろうと、「観想的生活」を支持する論者であろうと、両者の比較を通じて自らの結論を導き出しているということである。加えて、最も重要なことに、ここではそのタイトルに明示されているように、「コモンウェルス」論という枠組みの中で有徳な市民の活動が説かれている。そしてこのことは、エリザベス期のイングランドにおいて、(アリストテレスの「政治的動物(som politikon)」という理念のように)「コモンウェルス」がこのような市民が活動する空間もしくは共同体として意識されつつあったということを示唆しているように思われる。いずれにせよ、「コモンウェルス」は(後述のように)宗教や法と関連しながら、エリザベス期に再び「政治参加」を喚起するための主要な「言説」となったのである。

二、「宗教的政治」論

言うまでもなく、政教分離の進展していない一六世紀のイングランドにおいては、依然として宗教的立場から副次的に政治について論じられており、前述のような政治的統治と関つた「コモンウェルス」論が宗教的要素と結合するのは必然的な成行きであつた。このような「宗教的政治」論の高揚の背景には、イングランドへの(本稿の主題である「リパブリカニズム」的なそれではなく、いわゆる権謀術数的な)マキアヴェリズムの普及と、それに対する宗教人の危機感があつた。このようなマキアヴェリズム批判はプロテスタント、カトリックを問わず、エリザベス期イングランドにおいて広く見受けられるものであり、しばしば「カメレオン(chameleon)」・「ポリティーク(politique)」・「マキアヴェリアン(Machiavellian)」・「無神論者(atheist)」とつた蔑称を通じて行われ²⁶た。そしてこの背景には、世俗的な「政治」が宗教に優先し、時には宗

教を利用しさえするという事態に対する宗教人の深刻な危機感があつたということは言うまでもなからう。また、このような危機感によつて生じた、頑ななまでの「政治」それ自体の拒否と神学的な政治論への執着は、神学的な思考の確固たる支配の現れというよりも、むしろ聖職者たちの防衛的姿勢を示すものであつた。

しかしながら、宗教人はただ単にマキアヴェリズムを批判しただけではなく、彼ら自身の政治論、即ち、「宗教的政治」論を提示したのだ。例えば、リチャード・フッカーが『教会統治の法』第五巻の冒頭で「我々は、純正で汚れなき宗教 (pure & unstained religion) が公共の統治 (public regime) に関するあらゆる関心事の中で最高のものであるべきだということに同意する」と述べているように、宗教に基づいた政治的統治が主張されたのである。フッカーは政治的統治における宗教の効能を次のように説明している。

宗教はあらゆる種類の人間を改善し、彼らを公共の事柄 (publick affaires) においてより実用的な (more serviceable) 人間にしなければならぬ、即ち、統治者たち (governors) はより良心 (conscience) を以て統治を行うように、下位の者たち (inferiours) は良心のためにより進んで服従するようにしなければならない……。

このように、この時期のイングランドでは宗教人でさえ現実主義的な「政治」を受け入れ、言い換えるならば、現実主義的な政治論が無視し得ない影響力を持ち始めたのである。同時に、フッカーによると、宗教は臣民の「服従」をもたらし一方で、「公共の統治」や「公共の事柄」に関するものであり、したがって、前述のような「コモンウェルス」の統治にとって不可欠なものであつた。そして、このことはフッカーの次の言葉に端的に示されていると言えよう。

……あらゆる身分の安全が宗教に依存すること、心から愛される宗教は人間の能力 (mens habilities) を完全にし、コモンウェルス (the Common wealth) におけるあらゆる種類の有徳な奉仕 (vertuous services) を可能にするということが明らかとなる……我々が考えるべきは、あらゆる真実の徳 (all true vertues) がその生みの親として真の宗教 (true religion) を称え、また非常によく統治されたコ

モンウェルス (all well ordered Common weales) が宗教をその最も重要な支え (their chiefest stay) として愛さねばならないということである。

以上のような「宗教的政治」論の極端な例として、カルヴァン主義者の「抵抗権」論が挙げられる。カルヴァン主義は政治思想もしくは社会思想の先駆とみなされてきたが、これらの思想は必ずしもカルヴァン主義固有のものではないと言える。つまり、カルヴァン主義者によつて展開された（とみなされてきた）「抵抗権」論はカルヴァン主義に特有のものではなく、彼らの敵対者であつたカトリック側にはほそのまま継承されたことはよく知られているし、彼らの社会思想は専らカルヴァン主義の教義から生じたというよりは、明らかにキリスト教人文主義に負うところが大きかったのである。また「抵抗権」論は宗教的な理論のみならず、国王と臣民の「相互契約」といったより世俗的な理論にも依拠していた。

加えて、一七世紀半ばと末のイングランドの古典的共和主義者の多くは反カルヴァン主義者であつたが、一六世紀末と一七世紀初頭においては「ピューリタニズム」とヒューマニズムの密接な繋がりが存在したと論じられてきた。その一方で、古典的ヒューマニズムはプロテスタントイズムに依拠したものでも、「ピューリタン」に特有のものでもないという反論もなされている。とはいえ、このことは、「リパブリカニズム」が完全に世俗的なものであり、政治と宗教、あるいは世俗的要素と霊的要素を切り離すことを意味しない。むしろ、エリザベス期を適切に理解する鍵は政治と宗教、言い換えるならば、古典的要素とプロテスタント的要素の混合について正確に描写し、評価することにある。

より正確には、このような混合を内包した反カトリックは、疑いなく主として初期ステュアート朝の文脈の中では宮廷の腐敗や邪惡な助言を批判し、カトリックの圧制・迷信から福音の自由を奪回する必要性を説くように駆り立てた。一方、エリザベス期において反カトリック感情は、イングランド国王は主権と自治権を保持しており、イングランドは外部の干渉を受けない世襲の君主政であると主張することにより、ローマ教皇とその支援者であるフランスとスペインに対する「敬虔な君主 (godly

「prince」あるいは「クリスチャンの主権者 (Christian emperor)」といった「絶対主義」の擁護を促進することになった。その一方でエリザベス治世の間、「君主政共和国」の兆候の下で今や慣習的に編成された態度・関心・実践の結合は、君主の「反ピューリタニズム」的な反動を生み出し、その治世が進むにつれて次第に自意識過剰かつ攻撃的な形で表現されるようになった。このような中心的な政治的価値を運ぶものとしての「反ピューリタニズム」の成長は、「君主政リパブリカニズム (monarchical republicanism)」の中心的な教義と想定に対し、強い反感を持っていた。とはいえ、このことは、政治的なものとしての「ピューリタニズム」が「君主政共和国」の主要な構成要素であったことの証左であらう。

また特に女性の歴史家により、エリザベス治世の特徴として女王のジエンダーが強調されているが、このようなジエンダーはしばしば宗教的な文脈の中で論じられた。周知の通り、エリザベスは「最高の首長 (Supreme Head)」もしくは「最高の統治者 (Supreme Governor)」としてイングランドに君臨したのだが、このような彼女の曖昧な地位は女性の統治に対する同時代人の不安から生じたものであった。そして、このような同時代人の不安はエリザベスをイングランドの「デボラ (Deborah)」とみなし、イングランドを古代イスラエルと同一視することへと繋がっていった(尤も、「デボラ」はその一例に過ぎない)。

旧約聖書によると、デボラの役割はイスラエル民を導いている神の命を直接的に授かり、その神意に依拠して彼女の王国を統治することであった。そして神とイスラエル民の媒介者であるデボラを通じ、神はイスラエルの歴史に直接的に介入し、イスラエル民をその敵から守ってきたのだ。この「デボラ」の理論をエリザベス期のイングランドに適用するならば、神がエリザベスを通じてイングランドの歴史に介入することにより、メアリ一世の背教を無効にし、イングランドのプロテスタントを守るということになる。その結果、「デボラ」はエリザベス期イングランドにおいて、復活したプロテスタントイズムの強力な象徴となったのである。

このようなエリザベスをデボラと同一視する見方は、女王に委譲され、預言者(ここではエリザベス)の発言によって「話される」神意とし

ての君主権の概念を仮定することになった。その一方で、聖書のデボラが軍の指導者だったバラク (Barak) を通じて神意を立法化したように、神意の解釈は例外的な状況を除き、未だ男性のものであった。言い換えるならば、エリザベスと男性の顧問官たちは彼女の直接的な(即ち、神意の解釈も含めた)預言の能力を、彼女が女王であることを示す要素として主張しようとはしなかったのである。その結果、男性の「政治的国民 (political nation)」のあらゆる地位の者たちからの自発的な「助言 (counsel)」はエリザベス治世における一つの際立った特徴となった。つまり彼らは、如何にして神意に沿った形で統治を行うかということについて女王に「助言」することにより、彼女の統治を正当化したのだ。以上のような「デボラ」の理論は、エリザベス期のイングランドに(特に「助言」という形で)「政治参加」をもたらしたのだが、既に述べたように、その背景になったのは当時の「女性君主」に対する不安であった。次の引用は、ジョン・ノックスの『女性の奇怪な統治に対する最初のラッパの響き』という著作の一節だが、これは正にそのような不安を示していると言える。

神は自然的人体 (natural body of mā) の中に、頭部 (head) が最も高い部分を占めるという、一つの秩序 (order) をお定めになつてきた。そして神は頭部を「頭部を除いた」体 (body) に連結させられ、そのことにより、そこ「頭部」からその他の体に生命 (life) と運動 (motion) がもたらされるのである。その「頭部の」中に神は、見るための目、聞くための耳、話すための舌をお作りになつてきたのであり、如何なる他の体の部分もそのような機能を果すことはできないのだ。その他の「頭部を除いた」体はそれぞれ独自の定められた部分と機能を持つているが、そのいずれも、頭部の部分も機能も持つことはできない。というのも、頭部がその他の「体の」上に突出しておらず、その部分「頭部を除いた体」について言うならば、両目が両手の中にあり、舌と口が下方の腹部にあり、両耳が両足にあるのだが、そのような体を見て怪物 (monster) だと思わない人がいるだろうか。まあ、人々はこのような体を見て怪物だと言うだけではなく、そのような体は長持ちしないと結論づけたりもするだろ

う。そして、女性 (woman) が主権 (empire) を帯びた、そのような
コモンウェルス (common wealth) の身体も同様に奇怪 (monstrous) で
ある。

要するに、ノックスはここで女性の統治を奇怪な身体に譬え、激しく
批判しているのである。厳密には、彼のこの著作はメアリ一世もしくは
メアリ・ステュアートを想定して書かれたものであり、エリザベス治世
のものではない。しかしながら、彼のこのような言明は、当時の「女性
君主」に対する共有された不安 (それを擁護する者であれ、批判する者
であれ) をよく表現しているように思われる。

このようにノックスは、女性による統治を「不自然な」ものとみなし、
「ボディ・ポリテイク」の理論、つまり王国を人体に見立てるアナロ
ジーを用いた上で、「女性君主」はその「頭部」にはなり得ないとしたの
だった。同時に彼は、「女性君主」によって統治された王国を「頭部」の
ない「政治的身体」とみなすとともに、彼はそのような王国を「女性君主」
の無能力の故に (自然な人体とは異なり、全く機能しない体という意味
で「偶像 (idol)」と呼んだのだった。

いずれにしても、ノックスは「女性君主」を否定的に捉えていたのだ
があるが、エリザベスの統治については神によって認められたものとして
容認し、この結果、ノックスは「助言」を「敬虔 (godly)」かつ「預言的
(prophetic)」なものとして認識することになった。つまり、彼は大部分
の同時代人たちと同様、「預言 (prophecy)」と「啓示 (illumination)」を
区別することにより、当代の「デボラ」としてのエリザベスの地位をも
たらしめたのだった。言い換えるならばノックスは、女性は神によって「啓
示」され得るが、「思慮」も含めた完全な「預言的」固有性はデボラとバラ
クが結合したように専ら男性の能力だと考えたのであり、神によるエリ
ザベスの「啓示」は公正な女王の行為に関する男性の「思慮」によって保
証されなければならなかった。

このようにして、メアリ、エリザベス期のイングランドでは「女性君主」
に対する擁護論と否定論が展開された訳だが、どちらかというと、プロ
テスタントとカトリックの両陣営がそれぞれの宗教を正当化するために
女王のジェンダーを「手段」として持ち出した側面が強いと言える。加

えて、エリザベス期について言うならば、「女性君主」に関する議論は
治世前期に特徴的なものであり、エリザベスの統治が安定し始めると下
火になっていったように思われる。ともあれ、以上のような「宗教的政治」
論が中世的な「秩序」や「服従」を希求しながら、ある程度の「政治参加」
を喚起したのは間違いないだろう。

三、「モン・ロー」における「慣習」と「理性」

最後にコモン・ローに関する「言説」について取り上げたい。従来の研
究では、例えばコモン・ローの「島嶼性」を主張したポコックやD・R・
ケリーのように、イングランドの法律家たちはコモン・ローに対する確
信の故に、ルネサンス・ヒューマニズムやローマ法といった大陸のパ
スぺクティヴに眼を閉ざしたままであつたとされてきた。とりわけポ
コックは、一九五七年に刊行された『古来の国制と封建法』の中で大陸ヨ
ーロッパとの比較というパスぺクティヴの下に、大陸とは異なるイン
グランド固有の政治言語をコモン・ローの「言説」に求め、それを「古来
の国制 (ancient constitution)」論という一個の類型として描き出そうと
した。

言い換えるならばポコックは、同時代の大陸諸国家とは異なり、コ
モン・ローという独自の自足的な法体系が存在していたイングランドで
は、このコモン・ローの起源が「記憶に残る以前の時代 (time out of
mind)」にまで遡り、その伝統は一〇六六年のノルマン・コンクエスト
によっても断絶しなかったという国制史観が伝統的に培われてきたと主
張したのである。彼はそれを「コモン・ロー・マインド (common-law
mind)」と名づけ、イングランド特有の政治的メンタリティを形成して
いるとみなしたのであるが、このようなメンタリティは職業法律家のみ
ならず、同時代のジェントルマンに広く共有され、内乱期や一六八〇年
前後のブレイディ論争を経て、後にエドマンド・バーク (Edmund
Burke) にまで連なる政治的言説の一つの系譜を形成したとしている。
特にポコックは、「古来の国制」論が下院のコモン・ローヤーの支配的
な政治言説であつただけではなく、王権側の論者を含めた (前期ステュ

アート時代の) イングランド共通の政治言語であったと述べることにより、後の「修正主義(revisionism)」に繋がる視座を提供したのだった。いづれにしてもポコックは、「古来の国制」論を説いたコモン・ローヤーたちの思考は、当時大陸ヨーロッパで流行していたヒューマニズムの知的雰囲気とは切り離された、イングランドに固有のコンヴェンション的な觀念に根ざした「島嶼的性格」のものであったと指摘したのである。

以上のようなポコックの先駆的業績により、一七世紀イングランドの国制や法は「古来の国制」論という観点から論じられるようになったのであるが、その基本的特徴は次の通りである。即ち、「古来の国制」論はジョン・フォートレスキュー(John Fortescue)の『イングランド法の礼賛について *De Laudibus Legum Anglie* (c.1470)』を一つの典拠とし、ジェイムズ期においてはエドワード・クック(Edward Coke)による延べ一三部にのぼる『判例集 *Les reports* (1600-15, 56, 59)』や、アイルランド法務長官ジョン・デイヴィス(John Davies)の『アイルランド判例集 *Le primer report des cases and matters en ley resolves and adijudges en les Court del Roy en Ireland* (1615)』に典型を見出すことができ、他の法体系に対するコモン・ローの「イングランド固有の(insular)」性格と優越性を主張する。また「古来の国制」論によると、イングランド法は「記憶に残る以前の時代」から続いてきた不変の慣例であり、臣民の権利と自由はこのようなコモン・ローによって保障される。そして、法の解釈主体が厳密に限定され、万人の有する「自然的理性(natural reason)」とは区別された「人為的理性(artificial reason)」を長い研究と経験を重ねて獲得し、イングランド法の歴史的由来を把握した職業法律家のみが法解釈に携わることができると主張するのであった。

ともあれ、このような「古来の国制」論は国王大権の伸長に対抗するための有力な理論装置として、一七世紀イングランドにおける「政治論争の主要なモードの一つ」となった。とりわけ、「古来の国制」論においては「慣習」と「理性」という二つの要素が重要であり、エリザベス期はローマ法もしくは中世自然法の受容により、両者が結合しつつあったという意味でその過渡期と位置づけられる。

また既に触れたように、フォートレスキューは「古来の国制」論の形成

において重要な役割を果たしたのであるが、同時に彼の著作は「島嶼的」な国民の慣習と新ブラトン主義的ヒューマニズムの融合に基づきながら、初期近代イングランドの法曹の哲学的・法学的発展の典拠とされた。そして、このような思考様式の中に、宇宙の自然的秩序と神の永久法はイングランド法のエクイティの原則の中に反映されるべきであるという考えが暗示されている。このことに関し、クリストファ・セント・ジャーマンは彼の主著『博士と学徒』の中で次のように述べている。

イングランド法(the lawe of Englande)の三番目の根拠は、王国全土で使用されている種々の一般的な古来の慣習(diverse general customes of olde tyme)に基づいており、このことは我が君たる国王とその祖先、そしてその全ての臣民(subgettes)によって容認され、承認されてきた。また上述の慣習は、神法(the lawe of god)にも理性の法(the lawe of reason)にも反していないので、常に王国全土の共通の利益(common welth)に適したものであり、必要なものであるとみなされてきた。それ故に、それらは法の効力(strength of a lawe)を獲得し、その結果、それらに反する者は誰でも、正義(justice)に反することになるのである。そして、これらは厳密にコモン・ロー(the comon lawe)と呼ばれる慣習である。またそれは常に、一二の人(小陪審)ではなく、そのような一般的慣習があろうとなかろうと、正義によって決定されるべきである。そして、これらの一般的慣習と、(次に続く章で出て来るだろうが)これもまた王国の古来の慣習(olde custome of the realme)によって発効するのであるが、格率(maxymes)と呼ばれるある種の原理(certayne princples)に、その王国の法の大部分は依拠しているのである。そしてそれ故に、我が君たる国王は、とりわけその戴冠式の際に、その王国の全ての慣習が忠実に守られるようにさせるといふ厳肅な宣誓(solempne oth)を行うのである。

セント・ジャーマンのこの著作は、(その翻訳も含めて)一六世紀前半に出版されたが、この時期の代表的な法学書であり、エリザベス期のコモン・ローヤーにも多大な影響を与えたものと思われる。セント・ジャーマンはこの著作の中で、イングランド法の根拠を六つ列挙している

のだが、ここで彼はその根拠の一つとして、イングランド法の古来性あるいは「慣習」を強調している。同時に彼は、このような「慣習」は「神法」と「理性の法」に反するものではなく、イングランド全体の「共通の利益」に適ったものであると主張している。因みに、この「理性の法」は自然法と同義であり、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas)が主張したように、自然法は自然の光によって明らかにされる神の意志であり、理性的本性に合致するものとそうでないものを人間に指し示す永遠不変の規範であった。それ故に、「理性の法」としての自然法と神法はしばしば一致するものと考えられた。そして、生得理性を備えた人間はこのような法を理解し、分有することができたのである。

このように一六世紀のイングランドでは、既に「慣習」と「理性」というコモン・ローの二つの側面が意識されつつあった。尤もセント・ジャーマンのコモン・ロー理論には、初期ステュアート朝の「古来の国制」論のように「慣習」と「理性」を結合させるための明確なレトリックは不在であるが、それでも彼の理論はいわゆる「取得時効(prescription)」や「時の検証」を想起させるものであり、「古来の国制」論の土台となったと言える。同時にセント・ジャーマンは、フオーテスキューと同様、政府の行政官の行為が法の代理機関である法廷と議会に対して責任を負うような制御システムを思い描いていた。このように、エリザベス期のイングランド人は必ずしも明確な形ではないにしろ、「慣習」と「理性」を内包したコモン・ローを持ち出すことにより、国王の「絶対的権力」に一定の制限を課し、(とりわけ議会を通じて)臣民の政治的権利を主張することができた。

またエリザベス期の法学院においては、祝宴(revel)を通じて理想国家という小宇宙もしくは型板が提供され、その中で「混合君主政(mixed monarchy)」の原理が生き生きと提示された。例えば、エリザベス治世後半の祝宴から窺えるように、当時の法学院では国王大権の過度の行使に対する不満が強まり、代替的な国制の枠組みが提示された。この時期の祝宴は、社会の政治的構造の根本的な変化が必要であるという認識と、その変化の結果への不安を反映している。法曹たちは、コモン・ローの主権が統治者と臣民に認識されている新しいユートピアを求めた

が、この理想国家を実現する手段は未だ明確ではなかった。社会と法と国制の規範の根本的な変更に伴うカオスに対する恐怖が、法学院の祝宴の中に見られる。そして、君主政によって安定がもたらされたが、祝宴で描かれたようなユートピア国家は遂にイングランドで達成されることはなかった。しかしながら、法学院のコモン・ローヤーが象徴的なレベルにおいて、「コモンウェルス」の共通の利益(collective good)のため、個人の自由を制限・規制するようにコモン・ローの義務についてはつきり述べたのは確かであろう。

おわりに

冒頭で述べたように、本稿の目的は既存の研究と同時代の史料(政治的出版物)を取り上げることにより、エリザベス期イングランドの「リパブリカニズム」について考察する際の「コンテクスト」を提示することであった。本稿における「リパブリカニズム」は、「政治参加」の意識全般といった広義の「共和主義的思考」を意味しており、したがって、本稿の目的は、エリザベス期のイングランド人が如何なる動機を以て、自らの生命を危険に晒しながら「市民」としてであれ、「聖者」としてであれ「積極的な「政治参加」を試みたのか、そしてその際に、彼らは如何なる「言説」を政治理論上の「レトリック」として利用することができたのかということを示すことであつたとも言える。そして本稿では、このような「リパブリカニズム」的言説を「コモンウェルス」論・「宗教的政治」論・「コモン・ローにおける「慣習」と「理性」の三つに区分しながら、それぞれの「言説」の基本的性格について論じた。

まず「コモンウェルス」は、「公共のものごと」や「共通の利益」を意味する古典古代の「レス・プブリカ」を代替する語としてルネサンス期のイングランドに定着したのであるが、特にエリザベス期において「コモンウェルス」の持つそのような側面が強く認識され、「政治参加」を喚起することになったものと思われる。そして、この「コモンウェルス」論という理論的枠組みの中で「徳」・「市民」・「活動的生活」といった主張がなされた、換言するならば、アリストテレスの「政治的動物」が「活動」

するための空間を表現するものとしての「コモンウェルス」がこの時期に定着した可能性が高い。

また仮に「リパブリカニズム」の本質を「政治参加」に求めるならば、それは専ら世俗的なものではなく、宗教的色彩も帯びてくる。このことは、政治と宗教が一六世紀のイングランドにおいて、未だ密接不可分のものであったという事実から引き出される必然的帰結であろう。そして、このような「宗教的政治」論は疑いなく、エリザベス期の「リパブリカニズム」の中心に位置していた。それは世俗的なヒューマニズムとの関係を保持しながら、「抵抗権」論のような宗教的義務としての「政治参加」を要請した。同時に、エリザベスは旧約聖書の「デボラ」に見立てられ、その結果、「女性君主」の統治を補完するための「助言」が重要視されるようになった。

加えて、エリザベス期のイングランドではフォートレスキューらの著作のみならず、ローマ法と中世自然法の受容により、コモン・ローの「慣習」と「理性」という二つの側面が認識されつつあった。尤も、このようなコモン・ロー理論は一七世紀の「古来の国制」論に比べ、(時の検証)のような「慣習」と「理性」を結合させるための明確なレトリックは不在であったが、それでも国王の「絶対的権力」に一定の歯止めを掛け、臣民の政治的権利を主張する際に有効であった。

本稿では、以上のような三つの「言説」について概観したのであるが、これらは相互に排他的なものではなく、むしろ別個に切り離して考えることができないものと言えよう。とりわけ、これらの「言説」は「コモンウェルス」という語によって結びついていたように思われる。つまり、「コモンウェルス」が「レス・プブリカ」を代替するものとして「政治参加」を喚起する一方で、宗教はこのような「コモンウェルス」の統治に不可欠なものであったし、コモン・ローはイングランド臣民の「コモンウェルス」を維持するためのものであった。

しかしながら、これらの「言説」は常に「リパブリカニズム」の側にあった訳ではない。例えば、「コモンウェルス」が国王の「絶対的権力」を正当化する際に持ち出されることもあれば、宗教とコモン・ローは「政治参加」をもたらす以上に、「秩序」や「服従」をもたらした。即ち、我々

はこのような「リパブリカニズム」的言説の作用と反作用について強く意識しておく必要がある。

最後に、本稿で取り上げた三つの「言説」、いわばエリザベス期の「リパブリカニズム」のイデオロギーは、とりわけ「助言」という政治文化によって具現化されていたように思われる。それ故に、現実政治というダイナミズムの中で、如何にして「リパブリカニズム」的言説が発せられたのかということについて考察されなければならない。加えて、(既存の研究のように)約半世紀にも亘るエリザベス期の「言説」を均質なものとして扱うべきではなく、时期的な区分を設けることにより、それぞれの「言説」の関係性、あるいは「言説」の変化および一貫性を析出する必要があるように思われる。

注

- (1) 例えば H. Baron, *Humanistic and Political Literature in Florence and Venice at the Beginning of the Quattrocento* (Cambridge, Mass., 1955); idem, *The Crisis of the Early Italian Renaissance* (Princeton, 2nd ed., 1966); idem, *From Petrarch to Leonardo Bruni: Studies in Humanistic and Political Literature* (Chicago, 1968) など参照。
- (2) J.G.A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton, 1975) (J.G.A. ポーコック著、田中秀夫、奥田敬、森岡邦泰訳『マキアヴェリアン・モーメント：フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』、名古屋大学出版会、二〇〇八年)。
- (3) Pocock, *Machiavellian Moment*, ch. XI.
- (4) この点の研究として D. Hirst, *The Representative of the People?: Voters and Voting in England under the Early Stuarts* (Cambridge, 1975); D. Norbrook, *Poetry and Politics in the English Renaissance* (London, 1984); B. Worden, 'Milton's Republicanism and the Tyranny of Heaven', in G. Bock, Q. Skinner,

- and M. Viroli, eds., *Machiavelli and Republicanism* (Cambridge, 1990); D.H. Sacks, 'Parliament, Privilege, and the Liberties of the Subject', in J.H. Hexter, ed., *Parliament and Liberty from the Reign of Elizabeth to the English Civil War* (Stanford, 1992); J.A. Guy, 'The Henrician Age', in J.G.A. Pocock, ed., *The Varieties of British Political Thought, 1500-1800* (Cambridge, 1993) など参照。
- (5) P. Collinson, 'The Monarchical Republic of Queen Elizabeth I', *Bulletin of the John Rylands Library* 69 (1987).
- (6) M. Peltonen, *Classical Humanism and Republicanism in English Political Thought, 1570-1640* (Cambridge, 1995).
- (7) *Ibid.*, p.54.
- (8) 以下はボークック著、田中ほか訳『マキアヴェリアン・モーメント』、五一七—一八頁を参照した。
- (9) この点については犬塚元「拡散と融解のなかの『家族的類似性』：ボークック以後の共和主義思想史研究 一九七五—二〇〇七」(『社会思想史研究』(No.32 二〇〇八年))に詳し。
- (10) J.F. McDiarmid, ed., *The Monarchical Republic of Early Modern England: Essays in Response to Patrick Collinson* (Ashgate, 2007).
- (11) Q. Skinner, *The Foundations of Modern Political Thought* (Cambridge, 1978), vol.1, p.215.
- (12) 塚田富治『カメレオン精神の誕生：徳の政治からマキアヴェリズムへ』、平凡社、一九九一年、三三三頁。
- (13) 初期テューダー朝の「コモンウェルス」論に関する作品については A.B. Ferguson, 'Renaissance Realism in the "Commonwealth" Literature of Early Tudor England', *Journal of the History of Ideas*, vol.16, no.3 (1955) に詳し。
- (14) *Ibid.*, p.305.
- (15) G.R. Elton, *Reform and Renewal: Thomas Cromwell and the Commonweal* (Cambridge, 1973), p.7.
- (16) 塚田「カメレオン精神」、三三三—三三三頁。また、トマス・エリオットは『為政者論』の中で、「レス・プブリカ」が不正確に「コモンウェール」と訳されてきたと述べ、「パブリック・ウィール (public weale)」をその正確な英訳としよう。
- (17) Thomas Floyd, *The Picture of a Perfect Common Wealth, Describing aswell the Offices of Princes and Inferiour Magistrates over their Subjects, as also the Duties of Subjects towards their Governours*. (London, 1600; Short Title Catalogue 11119), ff.1-3.
- (18) この理論については E. カントローヴィチ著、小林公訳『王の二つの身体：中世政治神学研究』、平凡社、一九九二年を参照。
- (19) 塚田「カメレオン精神」、三五頁。
- (20) 菊池理夫「ユートピアの政治学：レトリック・トピカ・魔術」、新曜社、一九八七年、四〇頁。
- (21) 木村俊道「顧問官の政治学：フランシス・ベイコンとルネサンス期イングランド」、木鐸社、二〇〇三年、四四頁。
- (22) 同上、七三頁。
- (23) D. Hirst, 'Court, Country, and Politics before 1629', in K. Sharpe, ed., *Faction and Parliament* (Oxford, 1979), pp.105-38; K. Sharpe and P. Lake, eds., *Culture and Politics in Early Stuart England* (Houndmills, 1994), pp.7-8. また新ストア主義については 山内進「新ストア主義の国家哲学」、千倉書房、一九八五年；G. エストライヒ著、阪口修平、千葉徳夫、山内進編訳『近代国家の覚醒：新ストア主義・身分制・ポリツァイ』、創文社、一九九三年を参照。ただし、ここで言及したストア主義の復興と、政治的統治と密接に関連したリプシウスの新ストア主義は区別されなければならない。
- (24) 木村「顧問官の政治学」、五一頁。
- (25) Peltonen, *Classical Humanism*, pp.173-77, Clipp.54-102.
- (26) Laurentius Grimaldus (Goslicius), *The Counsellor. Wherein the Offices of Magistrates, the Happie Life of Subiectes, and the Felicitie of Common-Weales is Pleasantly and Pithilie Discoursed*. [trans. Anon.] (London, 1598; STC 12372), sigs.B3v-B4r.
- (27) F. ラーフは F. Raab, *The English Face of Machiavelli* (London, 1965) の中で、テューダー期イングランドの政治観や政治論が未だ

に深く、キリスト教的世界観に支配されていたと述べている。

- (28) 塚田『カメレオン精神』九五―一二五―二三頁。
- (90) 同上、九五頁。
- (30) Richard Hooker, *Of the Lawes of Ecclesiastical Politie Eyght Bookes* (London, 1593, STC 13712), bk.5, sig.B1r.
- (31) *Ibid.*, sig.B1v.
- (32) 塚田『カメレオン精神』九七頁。
- (33) Hooker, *Of the Lawes*, sigs.B2v-B3r.
- (34) Skinner, *Foundations of Modern Political Thought*, vol.1, pp.xiv-xv, vol.2, p.323.
- (35) M.Todd, *Christian Humanism and the Puritan Social Order* (Cambridge, 1987), pp.8, 16-17, 94-95. Cf. V.M. Larmine, 'The Godly Magistrate: The Private Philosophy and Public Life of Sir John Newdigate 1571-1610', *Dugdale Society Occasional Papers*, no.28 (1982); J.C. Adams, 'Alexander Richardson's Philosophy of Art and the Sources of the Puritan Social Ethic', *Journal of the History of Ideas* 50 (1989); idem, 'Gabriel Harvey's Ciceronianus and the Place of Peter Ramus' *Dialecticæ Libri Duo in the Curriculum', Renaissance Quarterly* 43 (1990).
- (36) 『イギリスの文化』小林麻衣子「ジョン・ヘギヤナへの抵抗権論」『一橋論叢』第111号、第112号、110011年を参照。
- (37) B.Worden, 'Classical Republicanism and the Puritan Revolution', in H.Lloyd-Jones, V.Pearl and B.Worden, eds., *History and Imagination: Essays in Honour of H.R.Trevor-Roper* (London, 1981), p.195; idem, 'The Revolution of 1688-89 and the English Republican Tradition', in J.Israel, ed., *The Anglo-Dutch Moment: Essays on the Glorious Revolution and its World Impact* (Cambridge, 1991), p.252.
- (38) 『イギリスの文化』Norbrook, *Poetry and Politics* を参照。
- (39) Peltonen, *Classical Humanism*, pp.1-15.
- (40) Plake, "The Monarchical Republic of Queen Elizabeth I" (and

the Fall of Archbishop Grindal) Revised', in McDiarmid, ed., *Monarchical Republic of Early Modern England*, p.135. Cf. P. Collinson, *Godly People: Essays on English Protestantism and Puritanism* (London, 1983), pp.445-66; idem, *The Religion of Protestants* (Oxford, 1982), ch.4; R.Cust and P.Plake, 'Sir Richard Grosvenor and the Rhetoric of Magistracy', *Bulletin of the Institute of Historical Research* 54 (1981); R.Cust, 'The "Public Man" in Late Tudor and Early Stuart England', in P.Plake and S.Pincus, eds., *The Public Sphere in Early Modern England* (Manchester, 2007).

- (41) Lake, "Monarchical Republic" Revised, p.136.
- (42) 『イギリスの文化』P.Plake, 'Anti-Popery: The Structure of a Prejudice', in R.Cust and A.Hughes, eds., *Conflict in Early Stuart England* (Harlow, 1989) を参照。
- (43) Lake, "Monarchical Republic" Revised, pp.136-37.
- (44) *Ibid.*, p.137.
- (45) ヘリヤベスのインタビュー注目した研究は数多く存在するが、特に政治的状況との関連や論じたものとして M.T.Crane, 'Video et Taceo: Elizabeth I and the Rhetoric of Counsel', *Studies in English Literature 1500-1900* 28 (1988); C.Levin, 'The Heart and Stomach of a King', *Elizabeth I and the Politics of Sex and Power* (Philadelphia, PA, 1993); A.N.McLaren, *Political Culture in the Reign of Elizabeth I: Queen and Commonwealth 1558-1585* (Cambridge, 1999); 指昭博「女性君主の是非」指昭博編『王びんぐに受け入れられたか：政治文化のヘギリス史』刀水書房、二〇〇七年などを参照。
- (46) McLaren, *Political Culture*, p.23.
- (47) *Ibid.*, p.23.
- (48) 戴冠式の際に行われたページェントを考察する点により、ヘリヤベスが明確に「デボラ」として歓迎されていたことを指摘する研究もある。詳しくは S.Anglo, *Spectacle, Pageantry and Early Tudor*

- Policy* (Oxford, 1969); D.Bergeron, *English Civic Pageantry 1558-1642* (London, 1971) など参照。
- (49) McLaren, *Political Culture*, p.23.
- (50) *Ibid.*, pp.24-25.
- (51) *Ibid.*, p.25. またこの時期の「言説」については P.Collinson, 'De Republica Anglorum: Or, History with the Politics Put back', in *idem*, ed., *Elizabethan Essays* (London, 1994); S.Alford, *The Early Elizabethan Polity: William Cecil and the British Succession Crisis, 1558-1569* (Cambridge, 1998); J.A.Guy, *Politics, Law and Counsel in Tudor and Early Stuart England* (London, 2000); N.Mears, *Queenship and Political Discourse in the Elizabethan Realms* (Cambridge, 2005) など参照。
- (52) John Knox, *The First Blast of the Trumpet against the Monstruous Regiment of Women* (1558; STC 15070), sig.D3r-D3v.
- (53) *Ibid.*, sig.D3v.
- (54) McLaren, *Political Culture*, pp.55-56.
- (55) I.Maclean, *The Renaissance Notion of Woman: a Study in the Fortunes of Scholasticism and Medical Science in European Intellectual Life* (Cambridge, 1980), p.21.
- (56) Knox, *First Blast*, sigs.F3r-F5v.
- (57) 堀「女性君主の是非」六九頁。
- (58) J.G.A.Pocock, *The Ancient Constitution and the Feudal Law: A Study of English Historical Thought in the Seventeenth Century* (Cambridge, 1957); D.R.Kelley, 'History, English Law and the Renaissance', *Past and Present* 65 (1974).
- (59) ベーナム「古来の国體」論の關係については J.G.A.Pocock, 'Burke and the Ancient Constitution: A Problem in the History of Ideas', in *idem*, *Politics, Language, and Time* (Chicago, 1989), pp.202-32 参照。
- (60) Pocock, *Ancient Constitution*, p.54.
- (61) ハリッド「内乱期以前のインテンディッド史を絶対主義的な王権と立憲主義的な議会との原理的対立という枠組みで捉えるウィット史観に対し」、「異議申し立て」を行おうとする傾向を「修正主義」としている。ただし、実際に「修正主義」という固有の学派が存在した訳ではなく、また「修正主義」の内部でも意見の多様性が見受けられる。「修正主義」のうち「ホースト修正主義」については A.Hughes, *The Causes of the English Civil War* (Basingstoke, 1991); P.Lake, 'Retrospective: Wentworth's Political World in Revisionist and Post Revisionist Perspective', in J.F.Merritt, ed., *The Political World of Thomas Wentworth, Earl of Stafford, 1621-1641* (Cambridge, 1996); R.Hutton, *Debates in Stuart History* (Basingstoke, 2004); 坂井淳「堀昭博編『イギリス史の新潮流：修正主義の近世史』」彩流社「二〇〇〇年：山本信太郎「インテラン」宗教改革史研究をめぐって：「ユストリカル・リサーチ」V・G・デッケンズ特集号に寄せて」『西洋史学』第114号「二〇〇七年」など参照。
- (62) 堀「P.Christianson, 'Young John Selden and the Ancient Constitution, ca.1610-18', *Proceedings of the American Philosophical Society* 78 (1984); J.P.Sommerville, *Politics & Ideology in England, 1603-1640* (London, 1986); G.Burgess, 'Common Law and Political Theory in Early Stuart England', *Political Science* 40 (1988); J.R.Stoner, *Common Law & Liberal Theory: Coke, Hobbes, & the Origins of American Constitutionalism* (Kansas, 1992); E.Sandoz, ed., *The Roots of Liberty: Magna Carta, Ancient Constitution, and the Anglo-American Tradition of Rule of Law* (Columbia, 1993); J.Greenberg, *The Radical Face of the Ancient Constitution: St Edward's "Law" in Early Modern Political Thought* (Cambridge, 2001) など参照。
- (63) ホットンの「ホイグンズ解釈」に対する批判として H.S. Pawlisch, 'Sir John Davies, the Ancient Constitution, and Civil Law', *Historical Journal* 23 (1980), pp.689-702; *idem*, *Sir John Davies and the Conquest of Ireland: A Study in Legal Imperialism* (Cambridge,

1985)を参照。

- (64) Pocock, *Ancient Constitution*, pp.32-34.
- (65) 既に言及したように、本稿では「リパブリカニズム」を「政治参加」の意識全般と定義し、バーリンの「積極的自由」を重視している訳であるが、このようなコモン・ローはどちらかというと「消極的自由」に分類され得る。とはいえ、コモン・ローが臣民の政治的権利を主張する際に持ち出され、王権にある程度の制限を課したのもまた事実であり、そのような意味で「リパブリカニズム」という理論的枠組みの中に含めている。
- (66) Pocock, 'Burke and Ancient Constitution', pp.209-10.
- (67) Pocock, *Ancient Constitution*, p.46.
- (68) この点については特に土井美徳『イギリス立憲政治の源流：前期ステュアート時代の統治と「古来の国制」論』、木鐸社、二〇〇六年、第二章を参照。
- (69) P.Raffield, *Images and Cultures of Law in Early Modern England: Justice and Political Power, 1558-1660* (Cambridge, 2004), p.108.
- (70) Christopher Saint German, *Hereafter Foloweth a Dialoge in Englysshe, betwixt a Doctoure of Dyuynyte, and a Student in the Lawes of Englande: Of the groundes of the Sayd Lawes and of Conscience* [trans. Anon.] (1530?, STC 21561), ff.13v-14r.
- (71) W.R.Prest, *The Inns of Court under Elizabeth I and the Early Stuarts 1590-1640* (London, 1972), pp.132, 144.
- (72) 例えば土井『イギリス立憲政治の源流』、二〇九～一七頁を参照。
- (73) 「取得時効」と「時の検証」については土井『イギリス立憲政治の源流』、第三章・第一節に詳し。
- (74) Raffield, *Images and Cultures*, p.122.
- (75) エリザベス期の法学院の祝宴については Raffield, *Images and Cultures*, ch.3 に詳し。
- (76) *Ibid.*, p.122.
- (77) *Ibid.*, p.122.

(本学文学研究科史学専攻博士課程後期課程)